

2023 年度

北嶺中学校入学試験問題

国語

(注意)

- 1 問題が配られても、「はじめ」の合図があるまで、中を開かないで下さい。
- 2 問題は全部で **14** ページ、解答用紙は 1 枚です。「はじめ」の合図があつたら、まず、ページ数を確認してからはじめて下さい。もし、ページがぬけていたり、印刷されていなかつたりする場合は、静かに手をあげて先生に伝えて下さい。
- 3 答えはすべて、解答用紙の指定された位置に書いて下さい。
- 4 字数が指定されている場合は、句読点や記号も 1 字として数えて下さい。
- 5 質問や用事がある場合は、静かに手をあげて先生に伝えて下さい。ただし、問題の考え方や、言葉の意味、漢字の読み方などについての質問には答えません。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集めおわるまで、静かに待っていて下さい。

次の文章は、筆者（「ぼく」）が子供の頃を回想した小説の、二つの部分です。【文章Ⅰ】は小学五年生十月の学芸会当日から十二月までを、【文章Ⅱ】は翌年一月のある日を、それぞれ描いています。読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

【文章Ⅰ】

午後の真ん中へんがぼくの出る劇「三年寝太郎」だった。演出の*小林先生は大学の頃になにか演劇関係のサークルに入っていたようで、舞台の作りかたからしてとても凝っていた。それはリハーサルのときにだんだんわかつてきたり。まず、今までの学芸会の劇と照明がぜんぜん違つていて、夕方とか朝などが本当のような色合いになり、ぼくはそれだけで感動してしまつた。さらにカラスの鳴き声とか遠くの村祭りの太鼓や笛の音などもそれ用に作られたものを借りてきてあって、その操作は裏方の児童がやつていた。

シャツクリのマヌケな大男役のぼくは一時間前から顔に化粧され、顔全体は土色に、頬などは、まいつたなあ、と思うくらい丸く赤く塗られ、その上にものすごく大きな黒いテンテンをつけられ人間テントウ虫みたいにされた。最後に手拭いで頬かぶりをすると、自分でも誰だかわからないような顔になつていたからへー1ー気持ちはあまりなくなつていった。

最初の頃は新聞紙で作っていた体を大きくするためのヨロイみたいなものもボール紙で同じように自分たちで作つた。これはけつこう難しく三人の裏方の友達が手伝つてくれた。その上に古い敷布に色を塗つて野良着みたいにしたのをAハオリ、高下駄を履くと学年でぼくが一番せいたかノッポでもあつたので自分でもへー2ーくらいの大男になり、小林先生に言われたように全身を大きく上下にゆすりながら「ギヨツ」「ギヨツ」と大声をだしてシャツクリをする。その恰好で歩いてみると、ほかの出演者や裏方がみんな手を叩いて笑つた。

ぼくは、寝てばかりいて悪がしこいコトばかり考へている寝太郎がつかまつてむしろBマキにされ、川に流される運命となり、二人の農夫に担がれてくるタイミングで舞台そででスタンバイしている。担がれながらも寝太郎はうまいことを言つて担いできた二人を金のあるところに行かせ、農道にいつたん下ろさせることに成功し、寝太郎はその隙になんとか逃げられないかと考えている。そこにぼくが出ていくのだ。

「暗い道は何も見えなくてあぶねえなあ」などと言ひながら例の体の上下を大きく動かす「ギヨツ」をやる。

最初の「ギヨツ」で多くの観客が笑い、その笑い声に最初はぼくが圧倒されてしまつた。寝太郎とのセリフのやりとりはちよつとだけあるのだがぼくは短いセリフを言いながら「ギヨツ」のほうもやらねばならず^{すき}なかなか忙しい。「ギヨツ」は観客も期待しているらしく笑い声はますます大きくなつていき、寝太郎のセリフが笑い声で観客に聞こえないくらいになつた。

ぼくはたいへんいい気分になり、演劇つて面白いものだなあ、と思った。その劇はその日一番面白いという評判になり、終わつたあと小林先生は出演者や舞台の裏で手伝つていて裏方児童全員に一本ずつ、子供ではなかなか買えないバヤリースオレンジをふるまつてくれた。

けれど、家に帰つて①そんな話を家族に楽しく聞かせるわけにはいかなかつた。臥せつてゐることの多かつた父の具合が日に日に悪くなつていてからだ。往診してくれた医者は入院をすすめたが、へ3へ父にはその気持ちはなく、医者の往診があるときだけ底力を出していくつもより元氣そうにしているのよ、と母は困つたような顔をして兄や姉たちに話していた。

秋がすぎ、冬になると父はもう布団から起きることもなくなり、ぼくや弟は家にいるときは大きな声をだしてはいけない、と言っていた。

父の病気は当初重い「肺炎」と聞かされていたが、それだけではなくおおもとは結核のようだつた。それは下の子供たちには知らされていなかつた。本格的な冬に入つてから嫌な響きのする咳が続き、苦しそうだつた。子供心にも父は重い病気にかかつてしまつてゐるのだ、ということがわかつてきていた。

【文章II】

葬儀から一週間ぐらいした土曜日の午後に突然小林先生がやつてきた。

恐縮している母に、少し話をしたいと思いましてね、とⅢことわり、ぼくは客間で先生と向かいあつた。

小林先生は少しだけ笑顔を浮かべ「いろいろたいへんだつたなあ」と最初に言つた。

ぼくは先生が家にやつてきた理由がまだよく分からず、あいまいにうなずいた。たしかに家族を見ているとたいへんな一週間だつたけれど、父は長いこと自由に歩きまわることもできない病人でもあつたので、交通事故で急に他界したわけでもないからある程度覚悟みたいなものはできていた。でもそれを言うのはへ4へようだつたので黙つてまたうなずいた。

先生は、ゆつくりした口調でいろいろな話をした。世間話のようなものから父親が早くに亡くなつてしまつたけれどがんばつて立派な仕事をなしとげた人の話など、いろいろだつた。

早くにお父さんを亡くしてしまつといろいろ辛いことを乗り越えていかなければならぬ状況にも直面するけれど、今しつかりと前を向いて進んで行けば、これまでと変わらず君の人生は前途へ5へことを忘れないように。

そういう話をいろんな方向からしてくれた。話は一時間ぐらい続いたが、ぼくはずつと聞いているほうが多かつた。ぼくがあまりにもシンとして聞いているので先生はどうもこれではまずいと思つたのか、話を急に変えた。笑い顔が少しまじつていて。

「それにしても去年の秋の学芸会『三年寝太郎』での君の活躍は素晴らしいね。職員のあいだでも話題になつてゐたからね。ああいうのを主役をすつかり食つてしまつた、というんだよ。Ⅳしてやつたり、とぼくも思つたからね」

あの劇の練習から学芸会当日までいろんな事があつたけれどぼくは劇の練習をすることに集中している時間が嬉しかった。家で臥せつていることが多くなつた父の力のない咳を聞いてシンとしている日々から逃れられていた。父の具合が悪いということは先生にも言わざにいた。言えば心配してぼくはあのマヌケな大男の役からはずされてしまうかもしれない、と思ったからだ。

本当は父が元気になつて、あの学芸会に母と一緒にきて貰いたかった。でもあの日、家からは誰も來ることができなかつたし、⁽²⁾そういう話をぼくもしなかつた。

母が新しいお茶をいれ、お茶菓子を持ってきたところで、小林先生はえらく恐縮して「これをいただいてもう失礼しますので」と少し腰を浮かせて言つた。

ぼくたちの動きを察したように庭で犬のジョンがガサゴソ動き、小さく鳴いた。

（椎名誠『家族のあしあと』）

【注】* 小林先生……「ぼく」の担任でもある若い男の先生。五学年全体で作る劇を担当し、重要な役に「ぼく」を選んだ。

(+) A・Bのカタカナを漢字に改めなさい。

(二) へ 1 へ 5 を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～ソより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア 多難な	イ 無責任な	ウ 底知れない
カ 頑固な	キ 生意気な	ク もどかしい
サ 冷静な	シ 真面目な	ス 恥ずかしい
エ お茶をにごす	オ 堂々としている	
コ もつたいぶる	コ 洋々としている	
セ びっくりする	ソ 歴然としている	

(三)

I～IVのこのでの意味として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 凝っていた

ア 工夫していた
イ 片寄っていた
ウ 気負っていた
エ 謎めいていた
オ 目立っていた

II なかなか

ア かえつて
イ 簡単には
ウ どうしても
エ 思った通り
オ 予想以上に

III ことわり

ア おわびを言い
イ わけを説明し
ウ お茶を遠慮し
エ お悔やみを述べ
オ 席を外してもらい

IV してやつたり

ア どうにか切りぬけた
イ 主役を支えてあげた
ウ 上手にごまかされた
エ 期待通り演じ切った
オ 教えたかいがあつた

(四) ① 「そんな話」とは、どんな話ですか。三十字以内で説明しなさい。

(五) ② 「そういう話」とは、どんな話ですか。二十字以内で説明しなさい。

(六) 筆者の心境の説明として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 【文章Ⅰ】では学芸会の晴れ舞台を懐かしみ、【文章Ⅱ】では小林先生とのやりとりを通して、父の死という、あまりに突然の出来事を受け止めかねていた「ぼく」を、我ながら痛ましい思いで見つめている。
イ 【文章Ⅰ】では先生や友人との活発なやりとりを描き、【文章Ⅱ】の、小林先生や母の話にもほとんど言葉を返せなくなってしまった様子と比べて、当時の複雑な心境がよみがえり、いたたまれなくなっている。

ウ 【文章Ⅱ】で父の死にも動搖せず、小林先生の話を落ち着いて聞いている「ぼく」を、【文章Ⅰ】で舞台作りやジユースに興奮している「ぼく」と比べ、急に大人になってしまったことを切なく思つていて。

エ 【文章Ⅱ】で小林先生の話をきっかけに、【文章Ⅰ】の頃の胸中を「ぼく」自身が改めて理解してゆく様子を描き、「ぼく」をそつと気づかいながら劇に打ちこませてくれた小林先生に、改めて感謝している。

オ 【文章Ⅰ】で劇の指導に熱中する小林先生を描き、【文章Ⅱ】ではその先生に、「ぼく」を役から外した方がよいのではという迷いのあつたことを明らかにして、むしろ救いになつた大役をありがたく思つていて。

次の文章を読んで、あととの問いに答えなさい。

二、三年まえ、私は、三冊の本をもつて、四歳何ヶ月かの男の子のある家にいったことがある。二冊は、日本語の本であり、一冊は英語の本で、日本語の方は、おみやげであり、英語のは、ただ見せてもつてかえるつもりであった。

男の子は、いつも私から本をもらい、Aつけていたから、私が包みから本をだすと、さつそくにこにしてやつてきて、お話を読んでもらいう時独特の顔で、「ふん、ふん」とあいづちをうちながら聞きだした。

一つの本がおわると、すぐまた一つをとりあげて、「こんどは、これ」といった。

三冊読みおわって、私が英語の本をしまいかけると、その子は、びっくりして、

「どうして、それ、しまつちやうの?」と聞いた。

「だつて、これ、英語だから、おいていつても、①読めないから。」

私がいようと、その子は正直に、I心外だという顔をして、その本をめぐり、絵と私の顔を見くらべて、

「ぼく、ほら、②読めるよ。ほら、読めるよ」といった。

そこに描かれている絵は、その子に全部読めたから、私が読めないというのは、その子にしてみれば、まちがいだつたのである。幼児にとって、絵は、おとなの文字——つまり、考えたり、感じたりの材料になつてくれるもの——であり、または、それ以上のものかもしれないということを、その時ほどはつきり見せつけられたことはなかつた。

その男の子は、四歳にもなつっていたから、もうかなりなまいきなこともいい、じぶんでは、字が読めなかつたけれど、おとなの世界には文字があることは十分に承知していた。その子にとつてさえ、絵がよい場合、文字はこれほどII勘定にはいらなかつたのである。それから、まもなく、この子よりずっと幼い子どもと絵本の関係について、かなりはつきり知らされたのは、二年ほどまえ、デンマークのブルーナというひとのあらわした「ちいさなうさこちゃん」という本のシリーズを訳したのちのことだつた。このシリーズは、私が翻訳した外国の絵本のなかでも、一ぱん年少の子どもたちのための本で、絵は単純明快、ことばも、まだIIIほんとのストーリーを形づくりない、うたのようなものだつた。

このシリーズ八冊ができあがつた時、私は、これを、私の家の子ども図書室、「*かつら文庫」の本棚の上にならべた。私たち、この文庫のせわをするおとなは、新しい本をだす時、よくこうして、本をだまつてならべておいて、子どもの手のだしぐあいで、その本が、どのくらい子どもの興味をひくか、ひかないかを見ようとする。おどろいたのは、ブルーナの本は、三、四歳の子から、小学六年生までが、文庫にはいつてくるBなり、手にとつたということだつた。

③この吸引力が、まず私たちに、この本はよく勉強してみる価値があることを教えてくれた。

この本が出てまもなく、ある若い女のひとが、生後八ヶ月の甥に、「うさこちゃん」の本を贈つたという話をしてくれた。
「おもしろいですよ。じいとおとなしく見ていて、読んでやると、だまつてきているんです。またページをくると、またじいと見て、聞いているんです。」

私は、何ぼ何でも、八ヶ月では早すぎると思つたが、だまつていた。

私が早すぎると思つたのは、おそらく、その子は、うさぎも見たことがないだろうし、読んでやることばもわからないだろうし、ちんぶんかんぶんのことを与えられているのではないかとIV縣念したからだが、だまつてたのは、その子は、案外、それを喜んでいたのかも知れないし、またもう少ししたら、その後のようすを聞いてみようと思つたからだつた。

ところが、それから、数ヶ月して、べつの女人の人、ある若い母親が、「おもしろいことを見せる」といつて、小さいむすめ（十一ヶ月）をつれてきた。

若い母親は、五、六人のおとなの中に、その女の子をおき、「うさこちゃん」のシリーズのなかの「さーかす」を、その子のそばにおいた。

すると、その子は、その本をもつて、すぐわきにいた父親のところにはつていて、ひざにつかまって、父親の顔を見あげた。父親は、その本を読みはじめた。

この本では、右のページが色ずりの絵になつていて、左のページに四行のうたがついている。十一ヶ月の子どもの注意は、四行の文字を読むあいだ、集中できない。一行ほど読むと、ページをめぐれと催促する。

こうして、「さーかす」の最後のページまでくると、赤ん坊は、その本をもつて、となりのおとなどころにいつて、また読めというしぐさをした。こうして、そこにいるおとなに全部読ませてから、この子は満足して坐りこんだ。これが、この子の、にいちやんのまねをしてはじめた、夕食後の日課なのだそうであつた。

それから五ヶ月（その子一年四ヶ月）して、その母親に、あの行事は、まだつづいているかと聞いてみると、その子に読んでやる文は、だんだんながくなつて、ある日、

「おんがくたいもせいぞろい
あおいぼうしにあおいふく」

のところにきたら、突然、「ぼち！」といつて、絵をゆびさしたという話をしてくれた。

その子にとつては、帽子は、外出のたびに、かならずかぶせられる、外出とは切つても切れない関係にある、とくべつ意味のあるものだつたそうだが、その子はそれを、絵のなかにある「ぼち」と同種のものと認識したのであつた。

この一連の話を聞いて、私は、④八ヶ月の子どもに、その絵本ははやいなどということをいわないでよかつたと思つた。

この児童たちにとって、この絵本は、最初、何かおもしろい形がはつきりした色で描かれていて、それを手にすると、身辺のおとなが何か節をつけていっててくれるもの——つまり、形と音どがともなつたものであつたにちがいない。そして、それをくり返し、読めとせがんだのは、それが^⑤快い経験であつたからにちがいない。

描かれているものや、読んでもらうことが、ちんぶんかんぶんであつても、児童のまわりには、現実に、ちんぶんかんぶんのことがあつて、そういうものにぶつかっていくあいだに、子どもは知つたり、発見したりして喜ぶのにもちがいない。

それにしても、人間に絵が読めるということは、なんというすばらしいことかと、私は思つた。犬や鳥は、目や耳があんなに鋭敏な^{えいびん}のに、絵はわからない。犬や鳥は、色をつかつて、ある形がかかれているのを見ても、そこから何のいみもくみとれない。けれども、一歳二、三ヶ月の子どもは、「ぼち！」を認識する。

そして、その子は、現実に見たものを、頭の中でもう一ど、そらで組み立てる作業——どんなほかの動物もできない作業——を、どんどん頭のなかでつみ重ねていって、やがて、現実の形や絵、いまのはやりのことばでいえば、イメージの力をかりないでも、イメージを思いうかべることもできれば、そこから進んで抽象観念にまで到達することができる。

そして、その作業は、けつして学校へいって、勉強といわれるものがはじまつてから、はじまるのではなくて、生まれるとまもなく、その第一歩の活動がはじまっているのだということは、子どもたちを見ていると、いやでも教えられないわけにはいかない。

（石井桃子「子どもにとって、絵本とは何か」）

【注】 * かつら文庫……一九五八年、筆者が東京都杉並区荻窪にある自宅の一室に開いた、子供のための図書室。児童書がまだ少なかつた時代に、約三五〇冊の蔵書と自由に読める場所を提供し、貸し出しも行つた。二〇〇八年に筆者が亡くなつた後も、その志を継いで活動が続けられている。

(+) — A 「つけ」、— B 「なり」を、本文と同じ意味で使つてゐるものと、次のア～オよりそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|------------|--------------|---------------|---------------|
| A つけ | ア 備えつけの家具 | B わり | ア 何でも言いなりになる |
| イ 聞きつけない言葉 | イ 自分なりにやつてみる | ウ 一目見るなり泣き出した | ウ 座りこんだなり動かない |
| ウ 胸に刻みつけたい | エ 急いでかけつけた | エ 大なり小なり成長がある | オ 何かにつけて言う |

(二)

～～～ I～V のことでの意味として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I 心外だ

ア 自分勝手だ
イ 驚かせたい
ウ 話にならない
エ とんでもない
オ 思つた通りだ

II 勘定

ア 手
イ 耳
ウ 考え
エ 視界
オ 予定

III ほんとの
ア 物語としての
イ 原作者らしい
ウ 現実味のある
エ 原書の通りの
オ 実話に基づく

IV 懸念した

ア 注意した
イ 確認した
ウ 想像した
エ 提案した
オ 心配した

V そらで

ア 最初から
イ 自分一人で
ウ 節をつけて
エ 実物なして
オ ぼんやりと

(三) ①「読みない」、―― ②「読める」という二つの表現において、「読む」とは、絵本の中の何をどうすることを意味していますか。「読む」という言葉を使わずに、それぞれ十五字以内で説明しなさい。

(四) —— ③ 「この吸引力」とは、何の、どのような力ですか。三十字以内で説明しなさい。

(五) —— ④ 「八ヶ月の子どもに、その絵本ははやいなど」といわないでよかつた」とあります、筆者はなぜそう思ったのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア うさぎを見たことがない幼児でも、絵の中に何か好きなものを見つければ、そのシリーズを楽しめることを教わったから。
イ 形から読みとるという、人間にだけ与えられている力は、小学校に入る前に鍛えなければならぬと気づかされたから。
ウ 長時間話を聞くことのできない幼児も、「さーかす」だけは、親のいない時に一人で楽しんでいることを教わったから。
エ 絵本を毎日読んでもらっていると、一歳前の幼児も、文字を認識して抽象思考にたどりついている様子を目にしたから。
オ 絵を手がかりにしてものと言葉を結びつけ、観念を作り上げてゆく作業は、生後すぐに始まっていることを理解したから。

(六) —— ⑤ 「快い経験」について、どういうことを「快い」と言っているのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 幼い子供が、兄や姉のまねをして父や母に絵本を渡し、ページをめくつてもらいながら色や形をながめる、ということ。
イ 若い親が、我が子の喜びそうな絵本を何冊か選んで並べておき、子供にせがまれるたびに読んで聞かせる、ということ。
ウ 幼児が、絵をながめながらそれに合わせた声を聞き、そのくり返しの中で、少しずつものを認識していく、ということ。
エ 幼児が、文字を読めないうちから大人の音読を毎日くり返し聞くことで、認識できる言葉を増やしてゆく、ということ。
オ 大人が、様々な本を手にする子供達を觀察することで、他の動物の持っていない素晴らしい力を実感する、ということ。

次の文章を読んで、あとの間に答へなさい。

かつては東北の方言と九州や沖縄の方言はまつたく異なつていて、互いにコミュニケーションをとるのも困難でした。共通語を全国に浸透させるには長年の努力が必要でした。日本人だから最初から同じだつたわけではなく、A キンシツな日本人を「つくる」必要があつたのです。

アメリカの政治学者のベネディクト・アンダーソン（一九三六～二〇一五）は、国民国家は古くから変わらず存在したわけではなく、近代化の過程で想像される共同体としてつくりだされてきたと述べました（『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』）。国境に囲まれた土地に住む国民というまとまりを私たちがあたりまえに思えるようになるには、国を中心から発信される出版などのメディアの発達、国語の成立や辞書の編纂、全国統一の国民教育など、① さまざまな仕組みによつて、その「想像の共同体」を支える必要があつたのです。

もちろん私たちの実感レベルでは、日本人には古くから固有の文化があり、日本人らしい性質がずっと昔から維持されてきたというイメージが「1」です。それが想像の產物にすぎないなんて言わると、いやな気分になる。「わたしたち」の存在が否定されたような感じがします。それは「わたしたち」の存在の輪郭を維持したいという思いがあるからです。

でも、その輪郭の連續性を支えているさまざまな「日本文化」には、最近になつて一般化したり、海外に由来したりするものが少なくありません。B キヌの着物も、瓦屋根も、畳の間も、一般庶民の生活に浸透しはじめたのは明治以降のことです。綱引きや火祭り、お盆や節供などの年中行事には中国大陸や朝鮮半島の文化と共通するものがたくさんあります。

それは日本人が外来の文化をうまく変形しながら取り入れるのに長けていたからだ——。そんな声が聞こえてきそうですが、それはかならずしも日本人だけに限られた現象とは言えません。

歴史学者のエリック・ホブズボーム（一九一七～二〇一二）らが編集した『創られた伝統』は、一九〇二〇世紀にかけての欧米やその植民地の研究事例をもとに、さまざまな国や地域の「伝統」が長い年月を経たものではなく、「ごく最近になつて成立したり、ときに捏造されたりしたものだ」という、ショッキングな指摘をしました。「伝統」というものは常に「2」につじつまのあう過去と連續性を築こうとするものである。ホブズボームはC ジヨロンにそう書いています。

一五〇年前といまの日本人の暮らしは、まったく違います。しかも一五〇年前の日本列島に暮らした人びとは、もうだれ一人残つていません。日本人は、みんな入れ替わつていて。それでもなお日本人や日本文化はずつと続いている。そんな意識が私たちにはあります。

す。

学生に「日本文化とは何ですか？」と聞くと、みんな同じように答えます。着物や華道、茶道、相撲、歌舞伎、侍、侘び寂び……。

でも、教室に着物を着ている人は一人もいません。ふんどしをつけている人も、歌舞伎役者も、ちよんまげ頭の人もいません。だれもその「日本文化」にあてはまらなくとも、それらが日本人の固有の文化だと信じて疑わない。不思議なことです。もともと武士階級の侍なんて、全人口からみればごくわずかでしたし、庶民はキヌの着物を身につけることが禁じられていました。極端な話、いまも昔も一部にしか存在しなかつた要素であっても、日本人の文化だと考えることは可能なのです。

「日本人」というのは「器」であって、何がその「なかみ」として差異を構成するのかは時代によつて変化します。そうしてなかみが変化しても、日本人という容れ物、つまり境界そのものは維持される。それは日本人ではない人たちとのあいだに境界線が引かれているからです。

もし世界中に日本人しかいなくなつたら、「日本人」というカテゴリ（＝容れ物）に意味はなくなります。「日本人」は、「日本人ではない人たち」との関係においてはじめて「日本人」でいられるのです。

さらに「日本人」という境界は、つねに存在する（＝3）なものではありません。たとえば、私たちはよく関西人はどうだとか、関西人のなかでも京都人はこうで、大阪人はこうだといった言い方をします。そのとき「日本人」としてのまとまりは無視されます。

「関西と関東は文化が違う」と言うとき、そこに明確な差異があることを疑う人はいません。その関西人と関東人の比較では、京都人と大阪人の違いは意識されなくなり、同じ関西人としてキンシツな存在にされます。どういう境界線で比較するかで、「差異」そのものが変わるのです。

集団と集団との境界をはさんだ「関係」が、その集団そのものをつくりだしていく。「つながり」によつて集団間の差異がつくられ、集団内の一貫性が維持される。

ある輪郭をもつた集団は単独では存在できません。別の集団との関係のなかで、その差異の対比のなかで、固有性をもつという確信が生まれ、それが集団の一体感を高める。それは、「わたし」が「他者」との交わりのなかで変化してもなお、「他者」との境界線をはさんで「わたし」であり続けるのと同じです。

他者との差異が集団としての一体感や持続性を生み出すように、「わたし」という存在の輪郭も、ひとつ的情感や身体経験をひとまとめにしておくために必要とされます。他者と交わることで輪郭が溶け出して交じり合つてしまふからこそ、その輪郭を固める「ソウチ」が必要とされるのだと言つてもいいかもしません。

精神科医の木村敏（一九三一～二〇二二）は、*統合失調症は「わたしがわたしである」ということに確信を持てなくなつたときに生まれる病気だと思います（『自分ということ』）。 「わたし」という存在の感覚は、だれにとつてもあたりまえに感じられるもので

はなく、それが失われることもある。私たちはその輪郭を維持しないと、とても生きづらくなるのです。

「わたし」の輪郭を維持する。そのことを身近な例に引きつけて考えてみましょ。たとえば、杖つえを使って歩いている人にとって、杖は身体の一部のように感じられるはずです。メガネをかけているとき、そこで「見ていく」のは「メガネ」ではなく、「わたし」だと思つてゐるのも同じです。「わたし」の眼だけでは見えていないにもかかわらず、見ていく「わたし」がはつきりと感じられる。道具を使うかどうかだけではありません。私たちは音を自分の耳で聞いていると感じます。でも当然ですが、その音の振動を伝えてるのは空気です。空気がまわりに充满しているからこそ、音が届く。音はそれを発するものの振動とそれを伝える空気の振動、その震えを知覚する耳という身体器官との協働作業をとおして、「聞こえる」わけです。でも経験のレベルでは、「わたし」が聞いているとしか感じられない。

そもそも②「わたし」の経験は外部の世界へと拡張しながら、それらとの交わりをとおして構成されている。私たちのへ4な境界は、つねに外部の「わたし以外のもの」と連動する開かれたものなのです。それでも、ふつうは「わたし」をしつかりとした輪郭のある独立した存在として経験できる。考えてみると、けつこう不思議なことです。（松村圭一郎『はみだしの人類学』）

【注】 * 統合失調症……思考や行動、感情をまとめていく力が低下する病気。

() —— A～Dのカタカナを漢字に改めなさい。

() へ1へ2へ3へ4へを補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～クより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア 内面的 イ 画一的 ウ 絶対的 エ 身体的
オ 一般的 ク 現実的 キ 歴史的 ク 主体的

(三) ——— ① 「さまざまの仕組み」には、どのような目的がありますか。空白行ではさまたれた段落（一五〇年前と同じです。）をふまで、四十字以内で説明しなさい。

(四) ——— ② 「『わたし』の経験は外部の世界へと拡張し」について、このことの具体例として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 病気で苦しんでいる時、体を通常時より重く感じることがある。
イ 靴をはいて泥をふんだ際に、地面の感触を得ることができる。
ウ 偉人の伝記を読むと、その人の人生が実感とともに理解される。
エ 怪談話を聞いた後は、夜に幽霊が出るような気がしてしまう。
オ ものを口に含むと、味だけでなく、食感や香りまで理解できる。

(五) 本文の内容として最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 集団や個人は、差異による対立を生まないよう、周囲と協同することで自他の輪郭をあいまいにする、戦略的な存在である。
イ 集団や個人は、どのような比較であってもただ一つの同じ性質を感じなければ自身の輪郭を感じられない、危険な存在である。
ウ 集団や個人は、あらゆる変形を受け入れ、周囲との関係をもとにその都度自身の輪郭を規定していく、流動的な存在である。
エ 集団や個人は、周囲を参考にしながら古くからの文化や経験をもとに少しずつ自身の輪郭を形成していく、孤独な存在である。
オ 集団や個人は、積極的に固有性を主張することで周囲との違いを明確にし、自身の輪郭を補強する、身勝手な存在である。

